

二〇一八年度・学力考查問題【国語】

(中学第二回)

注意

- 一、試験時間は50分です。
 - 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
 - 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
 - 四、問題は12ページで□・□の二題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
 - 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。
- また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

—
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「私」(飯田・琴ちゃん)は、かつてテレビ番組の三十人三十一脚の予選に出場した時のことが心の傷となっていたため、六年二組のクラス会を敬遠していたが、卒業以来十五年ぶりに初めて出席した。

パン！

スタートを告げるピストル。

一列に並んで出た。

うまくいった。

この調子。

がむしゃらに走った。

前へ、前へ、体のぜんぶの力で。

速い。

今日の私は速い。

速すぎた。

残り半分の地点で足が止まった。

筋肉が軋む。

ひざが笑う。

もう動かない。

限界。

再び加速する余力はどこにもない。

私の失速に気づかないまま、左を走る奥山くんが一步前へ出る。組みあわせた腕と腕が離れかける。

待つて、奥山くん。

腕を気にして、足を怠った。

右足のひざから力がぬけた。

がくと世界が傾いた。

左足の紐が外れ、体ごと地面にくずれおちた。

奥山くんと私の足が離れた――。

切れぎれな記憶の連なりのなかで、皮肉にも、最も忘れたいその場面だけがスローモーションの緻密さで目の裏に焼きついている。

一列のラインは無惨に寸断された。なにが起こったのかというように、二、三歩先で奥山くんがふりかえる。それに連動してその横の男子、そのまた横の女子と、つんのめりの波が左へ左へ伝っていく。

グラウンドに転がる私を見える奥山くんの顔には表情がなかった。いつもの優しいまなざしも、「ごめんね」とさしだされる手もない。彼はただ影のようにのっぺりと立ちつくしていた。なにも言わない。動かない。その不動に、その沈黙に責められている気がして、私はますます動転した。

消えたい。この世界からいなくなってしまいたい。

しかし、それは許されなかった。バッテリーが切れたような奥山くんに代わって、業を煮やしたみんなが騒ぎだしたのだ。

「琴ちゃん、立とう」

「起きろよ、飯田」

「最後までがんばろう」

「ファイト！」

もはや勝ち目はない。決勝進出の望みは断たれた。テレビ出演も水の泡。それでも、せめてゴールをしようというみんなの声を無視できるわけもなく、私はごま粒ほどの余力をふりしほり、地中深くへ埋めこまれたような下半身を起こした。

みんなの声にはじかれるように、奥山くんもはたと動きを再開し、ぎくしゃくした手つきで私たちの足に紐をまわした。

もう一度、合体。再び組みあわせた腕は、しかし、どこかよそよそしい。

「最後までファイト！ レッツゴー二組！」

博多くんの涙声を合図に、整列しなおした横一文字で、三十一脚がまた走りだす。

半分やけくその「いち、に、いち、に」。

スタンドからの哀れみの拍手。

ゴール地点で待つ真梨江先生の悲壮な声援。

²不幸中の幸いは、ゴール後、ひざから血を流していた私を保健係が救護室へ連れていってくれたことだ。抱きあつて泣く子。地べたにうずくまる子。無言で肩を上下させる子。いたたまれないその場から立ち去ることはできて、しかし、決勝進出の夢を絶たれたみんなの盛大な嘆きは、救護室で消毒を受けているあいだも私を苛みつづけた。どんな顔をすればいいのか。どう償えばいいのか。いっそ転校してしまいたい。ところが――。

約二十分後、ひざごぞうにガーゼを貼りつけた私がスタンドの一角

へもどったときには、なぜだか空気が一変していた。

いったいなにが起こったのか？

さつきまでの慟哭が嘘のように、六年二組の面々はけろりといつもみんなにもどつていたのだ。もはやそこに湿気はなく、むしろ「楽しかった」「やるだけやった」「いい思い出ができた」などと、こぞつてポジティブなことを言いあっている。私の失態はなかったことになつていいのか、だれもそこには触れようとしない。まるであの転倒場面だけがみんなの記憶からポイント消去されたかのように。

「飯田さん、お疲れさま。すてきな思い出ありがとう」

真梨江先生がそう言つて握手を求めてきたとき、この人だ、と私は直感した。

私がないあいだ、彼女がみんなに言いふくめたのだ。

飯田さんを責めないこと。

飯田さんが転んだ話はしないこと。

飯田さんの失敗は忘れて「いい思い出」にすること。

私は自分の手を背中に隠したまま、真梨江先生から顔をそむけた。正直なところ、転倒のことをみんなから責められていたら、気の弱い私はかなり確率で不登校になつていたことだろう。が、当時の私はいじけた気分で、いっそ責めてくれればいいのにと思った。六年二組の「いい思い出」を守るため、私というマイナス要素を排除する。記憶から閉めだしてふたをするという真梨江先生のやり方に、みんなの嘘っぽい明るさに傷ついていた。

唯一、あの転倒が夢幻でなかったことを証していたのは、皮肉にも、急に変わった奥山くんの態度だった。

ラスト三週間の練習中、いつも二人で三脚だった。左の足と右の足を常につないでいた。私が転べば助けてくれた。励ましの言葉をくれた。なのに、最後の最後で、彼は私を突きはなした――。

のみならず、予選を敗退したその日以来、彼はほかのだれにも気づかれないくらいさりのさりげなさで、私を避けるようになった。目が合えばそらす。私が近づけば背をむける。まじめな子どもにありがちなかたくなさで、奥山くんは私を彼の視界からしめだすことにしたのだ。

結局、ともに口をきくこともないまま、私たちは小学校を卒業した。

クラスメイトたちの多くが進学する地元の公立を避け、知った顔のない私立の中学校へ入学したとき、私はようやく二脚の足で再び歩きだせる思いがした。新しい学校。新しいクラスメイト。もうクラスの全員に負い目を感じなくてもいい。奥山くんの冷たい背中に、決して交わらない瞳に、いちいち泣きたくならずに住む。新しい自分として一からやりなおせる。そう思った。

子ども時代の特珠な経験がどれだけ人を縛りつづけるものか、当時の私はまだ知らなかったのだ。

「私、今日は、教えてほしいことがあって」

宴の席は徐々にバラけて、早めにぬける遠来組やトイレ籠城組の空席が目立ちはじめた。急に居住まいを正した私に、あっちんと内田がわかりやすく瞳の落ちつきをなくす。

「あの、予選の日のことなんだけど」

「予選？」

「あの日……あのとき、私、転んで、それで負けちゃって。そのあと私、救護室へ行ったじゃない」

「あ……ああ」

「や、そうだった？」

私の目を見ない二人の声がかぶった。あっちはもはやサワーに手を出さず、内田もビールの泡がしほむにまかせている。

「あのあいだに、なんかあった？」

「なんか？」

「救護室からスタンドへもどいたら、急にムードが変わってたから。

泣いてたみんなが元気になって、なんだかへんな空気で……あの感じ、私、ずっと忘れられなくて」

「あの感じ？」

「ね、なんかあったんだよね」

あっちんと内田が額を突き合わせ、目と目でなにかを相談する。
口を開いたのは内田だった。

「いや、その、なんかあったってほどじゃないんだけどさ」

「でも、あったよね」

「ん、まあ」

「教えて」

「いや、その……ちょっと、言いづらいんだけど」

「大丈夫。言って」

お尻をもぞもぞした内田の手がおしほりを取り、意味もなく裏返す。

「決勝進出が消えて、あのとき、オレらその、まだガキだったからさ、

やっぱくやしいうってんで、泣いたりしてたんだ」

「うん」

「飯田の前で言うのもナンだけど」

「大丈夫。泣いてたのは知ってるから」

「ほぼ全員、泣いてた」

「うん」

「みんな、なかなか泣きやまなくて。で、なかにはその、あの、言いづらいんだけど……」

「言って」

「飯田が転んだせいだとか言いだすヤツも、やっぱ、いて」

「うん」

「飯田が転んだのは奥山のせいだとか言いだすヤツもいて。だれが速すぎたとか、だれが出遅れたとか、だれの紐の結び方が悪かったとか、どんだん、やなムードになってきて、それで、そしたら……」

「うん」

「その……」

はつきりしない内田の横から、業を煮やしたあつちんが割って入った。

「そしたら、真梨江先生が泣きだしたんだよ。私たちのだれよりも激しく、爆発的に」

「は？」

真梨江先生？

「ここでケンカしたら六年二組の思い出がいなしだって、真梨江先生、すごい勢いで泣きだして、止まらなくて。私だって悲しくてくや

しい、でも、ここは笑顔で終わらせなきゃいい思い出にできないんだって、わあわあ泣きながら言うの。大人があんなに泣くの見たの、初めてだったから、もうみんな、びっくりりしちゃって、おろおろして。クラス全員、一気に泣きやんだんだ。ぴたっと、ほんとに、水を打ったみたいに」

⁵ そうなんだよ、と内田がにわか勢いで言った。

「先生があんまり泣くもんだからさ、オレら、もう泣いてる場合じゃなくなっちゃって、あわててフォロイーにまわったんだよな。負けたけど最後までがんばれてよかったとか、最高の思い出になったとか、夢をありがととか、もう必死で。母親たちも一緒になって、元氣をもらった、感動をもらった、ありがとありがとの大合唱で」

「気がついたら、テレビカメラがその姿に食いついてて、それでやっど先生、泣きやんだんだよね。マスカラ落ちてるから今のはカットして、って」

「……」

あつけにとられて、声もなかった。私が救護室にいるあいだ、まさかそんなことが起こっていたなんて。

頭の整理がつかない。⁶ 自分のなかでふくれにふくれていた想像とかけはなれすぎている。

「私、真梨江先生がみんなに言ったのかと思ってた。私が転んだことは言っちゃいけないとか、悪いことは忘れようとか」

「ううん、そうじゃなくて」

昔とおなじどんぐりまなこで、あつちんが頭をふる。

「ま、ネガティブなこととか言うのと、また真梨江先生が泣きだすんじや

ないかって恐怖はあったかもしれないけど。でも、それよりも、子どもは子どもなりに、やっぱり琴ちんのこと心配して、そつとしいてあげようって思ったんだよ」

「私のせいで負けたのにな？」

「だから、琴ちんのせいじゃないって。あの日は、みんなが興奮してスピードあげすぎて、ペースが狂ってたんだよ。あれは、クラス全員のミス」

「てか、そもそも優勝したチームのタイム見たら、オレらと全然、格がちがったじゃん。メジャーリーグと少年野球くらいの差があったよ。決勝進出なんて、どだい夢の夢だったんだ」

いともからりと内田が言っただけ、泡のつぶれたビールを喉へ流しこんだ。

「ま、オレはきれいなレポーターにサインもらって、もうそれだけで大満足だったけどな。芸能人と会ったのも生まれてはじめてだったし」

「あ、私もサインもらった。あれ、どこやったかな」

初めてドーランを塗った大人を見た。帰りにお母さんたちがたこ焼きを買ってくれた。後日、テレビに真梨江先生の号泣シーンがノーカットで流れていた。オレのつむじも○・五秒だけ映った。みるみる声を軽快にしたりあがる二人を前にして、私は十五年間、後生大事に抱えつづけたしこりの収めどころを失い、呆けたようにまばたきをくりかえした。

なあんだ。みんなにとってあれは、真梨江先生の思惑とは関係なしに、本当に「いい思い出」になっていたのか。敗退の痛みなどはとうに克服し、子ども時代のまたとない珍経験へと昇華させていたのか。

あの転倒を今も引きずっているのは、転倒した本人だけなのか——。あの負けが彼らの傷になっていなくてよかった。そんな安堵をおぼえる一方で、十五年間の呵責のもとをとりそなつたような、なんとも言いがたい徒労感が広がっていく。

(森絵都『出会いなおし』文藝春秋より)

※1 慟哭：大声で嘆き、泣くこと。

※2 ポジティブ：積極的、意欲的。後述の「ネガティブ」は否定的、消極的の意。

※3 籠城：家や部屋の内部にこもって外へ出ないこと。

※4 マスカラ：まつ毛を濃く見せるための化粧品。

※5 メジャーリーグ：アメリカのプロ野球最上級のリーグ。

※6 ドーラン：舞台や映画出演者が使う撮影用の化粧品。

※7 昇華：物事がより良いものになること。

※8 呵責：しかり責めること。責めさいなむこと。

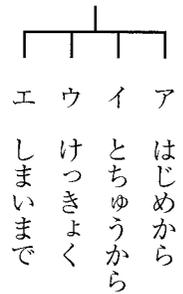
問一——線 a 「業を煮やした」・b 「どだい」とありますが、本

文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 業を煮やした

- ア 先を急ぎすぎて失敗した
- イ 失敗をかさねて反省した
- ウ 突然の出来事に興奮した
- エ うまくいかず腹を立てた

b ください



問二 冒頭部分「パン！〜足が離れた——」とありますが、この表現について述べたものとして適当でないものを選び、記号で答えなさい。

- ア 記憶の断片の積み重ねで、当時の緊張感や自分の転倒による予選敗退が心の傷として残っていることを表現している。
- イ 簡潔な文章によって、六年生の自分やクラスの仲間の姿が思い出としてありありとよみがえる様子を表現している。
- ウ 前半の好調な様子に対し、後半はそれが崩れていく悲劇的な変化が短い時間に起きたことを簡潔な文で表現している。
- エ いつもと違った奥山くんの態度が、結果的に予選敗退の原因だったことを場面の描写の積み重ねによって表現している。

問三 —— 線1「地中深くへ埋め込まれたような下半身」とありますが、この時の「私」の様子をていねいに説明しなさい。

問四 —— 線2「不幸中の幸い」とありますが、「私」がそのように考えた理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 転倒してひざにけがをしたが、治療してもらう間にクラスのみんなにどう謝ろうかと考えることができたから。
- イ 自分の転倒で決勝進出を逃したが、治療の間になぜかクラスのみんなの機嫌がよくなり責められなかったから。
- ウ けがの治療で保健室に行くため、転んだ時に急に変わった奥山くんの冷たい視線から逃れることができたから。
- エ 自分のせいで決勝進出を逃した直後のつらい場面から、治療をしている間は一時的に離れることができたから。

問五 —— 線3「六年二組の面々は〜もどっていた」とありますが、この変化はなぜ起きたのですか。その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 真梨江先生がどんなことがあっても飯田を責めたり敗退を嘆いたりしないようにクラスの生徒を指導したから。
- イ 本番で興奮したためにペースが速すぎたことを、クラスの生徒それぞれが全員のミスだと反省したから。
- ウ 真梨江先生が激しく泣いたことに驚いて、冷静さを取り戻して前向きな自分たちであろうとしたから。
- エ 走るのが遅い飯田の存在も含めて、勝てるはずがなかったことを六年二組のクラス全員が意識したから。

問六 —— 線4 「あつちんと内田が額を突き合わせ、目と目でなにかを相談する」とありますが、この時の様子の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 飯田を責める雰囲気になつた理由だけでなく、その時起こつたことの全てを打ちあけてよいか確認している。

イ 二人とも飯田の質問の真意を理解して、飯田を傷つげずに楽しい雰囲気でもクラス会を続ける方法を考へている。

ウ 敗退直後に真梨江先生が激しく泣いたため、みんなが飯田を責めなかつたことにしようとして示し合せている。

エ 飯田の転倒は予選敗退の原因ではなく、クラス全員の対応に原因があつたことをうまく伝える相談をしている。

問七 —— 線5 「そうなんだよ」言つた」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あつちんの上手なうそに同調することで、飯田のきびしい追及をかわし、この場面を乗り切ろうと考へたから。

イ 当時の思い出を話すうちによりくわしく思い出され、さまざまな記憶をありのままに語ろうと思つたから。

ウ 飯田が転んだせいだと言つてしまい、上手にうそがつけない自分の説明をあつちんが上手に助けてくれたから。

エ あつちんの説明の後に、今でも心に傷を残している様子の飯田に、打ち合わせ通りに励ましを言う順番だから。

問八 —— 線6 「自分のなかでふくれにふくれに想像」とありますが、どういうことですか。ていねいに説明しなさい。

問九 —— 線7 「十五年間の呵責のもとをとりそこなつたような、なんとも言いがたい徒労感」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 十五年間、みんなに対する申しわけなさを抱え、正式に謝罪しようと思つていたのに、真相は闇に葬られ、みんながい

い思い出になつていてというので、それを受け入れるしかないが、なんとなくしつくりこない。

イ 卒業後十五年が過ぎて、思い出したくもない出来事だったが、懐かしい友人たちと話すうちに心の傷も気にならなくなり、六年二組のかけがえのない思い出として実感できたので、悩んだことは無駄とはいえない。

ウ 十五年間みんなに謝ろうと思つていたのに、いい思い出になつていて優しく慰められ、気持ちの置きどころをなくしたところで、実は真梨江先生の思い出作りに利用されてたと知つたために、先生に対する怒りがこみあげた。

エ 卒業後十五年間、みんなの態度が変わつた理由を知りたかつたが、想像とは異なり、三十人三十一脚がいい思い出になつていたため、自分を責め続けてきたことが見当ちがいとわかり、気が抜けてしまった。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

関西在住の筆者は一九九五年一月一七日に阪神・淡路大震災を経験した。本文は二〇一一年三月一日に起きた東日本大震災の三か月後に書かれたものである。

〈隔たり〉ということを、いまもって強く意識させられたままだ。被災した地域の人びとと被災しなかったわたしたちとのあいだの〈隔たり〉。

地震が起こった直後、被災地から遠く離れたわたしたちは、まずはテレビの伝える映像に息を呑むばかりであった。映像に釘づけになる日を幾日か過ごし、十六年前関西で被災した者として、すぐに何ができるだろうかとおもった。義捐金を送ること、被災地に食料やぶつしがしつかり回るようとりあえず消費を控えるということ……。

被災地に声を届けなければとおもっても、どんな言葉にもまとまらなかつた。外からの声は、ときに暴言になる。そのことをいやというほど知っていたからである。神戸のとき、報道陣のヘリコプターに、建物の下敷きになっている人の声が聞こえないと憤った人もいたが、だれかがずつと見守ってくれていると感じる人もいた。おなじ一つの出来事が、被災のありようによって正にも負にもなった。そのことが身に沁みこんでいた。だからこのたびも、みな言葉づかいに慎重になり、口数もついで減った。

一方、仙台市街に住む友人によれば、地震後しばらく、倒壊はまぬがれたものの引き続く強い余震に、深夜独りで部屋にいるのが怖くて、みなぞろぞろ街路に出てきたらしい。うずくまっている人がいれば、だれかれなく「大丈夫ですか」と声をかけあった。背負ってきたもの、抱え込んできたものがみなチャラになったかのような負の解放性、それを友人は「まちが突然、開いた」と表現した。

が、日を追うにつれて、この対比は逆転してゆく。長く住みなれた家では身体はまわりの空間に溶けでているが、避難所では身体は皮膚の内側に閉じこもる。他人の気配に緊張は解けず、何かがちよこつと身体にふれるだけで、身は竦み、凍てついてしまう。皮膚はざるむけのそのように傷つきやすく、それにつれて気持ちもささくれだってくる。だからつい「事件」も起こる。罵りあいや怒号、そして慟哭が、あちこちで噴きだす。身をほどく空間もなく、たがいに擦り傷をこすりつけあうばかりのそうした生活は、耐えうるものではない。

当初、身を襲っているものの姿さえとらえられず、茫然とするばかりだった被災者の心根に、やがてじわりじわり、喪ったものの大きさが沁みってくる。家族や友人、あるいは家、あるいは職という、これまでみずからの生存の根であったものを失い、どうじぶんを立てなおすべきか途方に暮れるうち、だんだん言葉少なくなつてゆく。じぶんだけが生き残ったことに責めを感じ、押し黙ってしまう人もいよう。からだは忘れたがっているのに、頭のほうは忘れてはいけないう、そんな二つの声に引き裂かれている人もいよう。

やっと水道が通ったばかりの地域もあれば、普段どおりの生活に

戻った地域もある。「元」に戻ることを断念した人たちもいる。そんな彼らにとつて、一人一人の記憶が深くきざまれた柱や瓦、にちよう品の数々がひとまとめに「がれき」と呼ばれるのは、耐えがたいことだろう。そして、一人、また一人と避難所を去ってゆくなかで、取り残されたという感覚に押しつぶされ、崩れてゆく人も、悲しいけれどきつと出てくるだろう。〈隔たり〉は被災地でもさまざまなかたちで増幅するばかりだ。

逆に、被災地から離れたところからは、妙にはしゃいだ声が聞こえはじめている。「エコタウン」をはじめとする東北の復興構想を、メニユー片手に得々と語る人たち。いつじぶんの出番が来るかと固唾を呑んで待っている都市プランナーたち。政府の失政を声高にろんぴょうする人たち。あるいは、「がんばろう」「お見舞い申し上げます」という、もはや情性と化した物言い。ここにひとは、被災した人たち一人ひとりに届けられることのない「空語」をしかみないであろう。そして、被災地の救済そつちのけでなされた、首相退陣をめぐる永田町内の泥仕合。

被災した人、被災しなかった人の〈隔たり〉はここに極まれり、あきれるというよりはむしろ絶望的な思いでそれを受けとめた人も、もちろん数多くいる。見苦しいというよりも酷薄な国会の混乱を前にして、言葉を荒らげることなく、静かに深く「憂国の情」を抱く人もいる。

いづれにせよ、〈隔たり〉はなくなるとどこか、いつそう大きくなるばかりだ。被災地のなかでも、被災地とその外とのあいだでも。

被災地ではいま、多くの人が〈語りなおし〉を迫られている。じぶ

んと存在、じぶんたちという存在の、語りなおしである。

アイデンティティ（じぶんがだれであるかの根拠となるもの）とは「じぶんがじぶん自身に語って聞かせる物語」だと言った人がいる。^{※5}R・D・レインという精神分析医だ。じぶんはだれの子か？ じぶんは男女いずれの性に属しているか？ じぶんは何をするためにここにいるのか？ こういう問いが、人それぞれのアイデンティティの核にある。これらの一つでも答えが不明になったとき、わたしたちの存在は大きく揺らいでしまう。

子に先立たれた人、回復不能な重い病に冒された人、事業に失敗した人、職を失った人……。かれらがそうした理不尽な事実、納得しがたい事実をまぎれもないこととして受け容れるためには、じぶんをこれまで編んできた物語を別なたちで語りなおさなければならぬ。人生においては、そういう語りなおしが幾度も強いられる。そこでは過去の記憶ですら、語りなおされざるをえない。その意味で、これまでのわたしから別のわたしへの移行は、文字どおり命懸けである。このたびの震災で、親や子をなくし、家や職を失った人びとは、こうした語りのゼロ地点に、⁴否応もなく差し戻された。

こうした語りなおしのプロセスは、もちろん人それぞれに異なっている。そしてその物語は、その人みずから語りきらなければならぬ。戦後六十数年経っても、戦争で受けた傷、大切なだれかに死なれた事実をまだ受け容れられていない人がいるように、語りなおしのプロセスは、とてつもなく長いものになるかもしれない。

語りなおしは苦しいプロセスである。そもそも人はほんとうに苦しいときは押し黙る。記憶を反芻すること、傷にさらに塩をまぶすよ

うなことはしたくないからだ。あの人が逝^いってじぶんが生き残ったのはなぜか、そういう問いにはたぶん答えがないと知っているから、つい問いを抑^{おさ}え込んでしまう。だれかの前でようやく口を開いても、体験していない人に言ってもわかるはずがないと口ごもってしまふし、こんな言葉でちゃんと伝わっているのだからかと、一語一語、感触を確かめながらしか話せないから、語りは往々^{ちやう}にして途切れがちになる……。

語りなおすというのは、じぶんの苦しみへの関係を変えようとすることだ。だから当事者みずからが語りきらねばならない。が、これはひどく苦しい過程なので、できればよき聞き役^いが要る。マラソンの伴走者のような。

けれども、語りなおしは沈黙^{※7とつとつ}をはさんで訥々^{とつとつ}としかなされないうために、聴く者はひたすら待つということに耐えられず、つい言葉を迎えるにゆく。「あなたが言いたいのはこういうことじゃないの？」と。言葉を呑み込みかけているときに、すらすらとした言葉を向けられれば、だれしもそれに飛びついてしまう。他人がかわりに編むその物語が一条の光のように感じられてそれに乗る。じぶんでとぎれとぎれに言葉を紡ぎだす苦しい時をまたぎ越して。こうして、みずから語りきるはずのそのプロセスが横取りされてしまう。言葉がこぼれ落ちるのを待ち、しかと受け取るはずの者の、その前のめりの聴き方が、やっと出かけた言葉を逸^そらせてしまうのだ。聴^きくというの、思うほどたやすいことではない。

いや、そもそもわたしたちはほんとうにしんどいときには、他人に言葉^⑧をあずけないものだ。だからいきなり「さあ、聴かせてください」

と言う人には口を開かない。黙^{もく}り込んでいた子どもが、母親が炊事^{すいじ}にとりかかると逆にぶつくさ語りはじめるように、言葉を待たずにただ横にいるだけの人の前でこそ人は口を開く。そういうかわりをまづはもちうるのが大切である。その意味では、聴くことよりも、傍^{かたわ}らにいっづけることのほうが大事だといえる。

しかし、それは被災地から隔^へたつたところで暮らしている人にできることではない。ちよいとボランティアに行ったからといってできることでもない。

いま「復興」を声高に語る声は、濁流^{だくろう}のなかでおぼれかけている人に橋の上から語る声のように響く。詩人の和合亮一^{わごうりやういち}さんがある対談のなかで、「自分は川の中で一緒におぼれないと何もいえない」というジャーナリストの声にふれ、それこそ「想像力」であり、「川で一緒におぼれるのが詩なんです」と語っていた。濁流に入れなくても、濁流に入り込む想像力はもちうる。その想像力を鍛^{きた}えておくことが、いまは必要だ。東北の友人に次に会う日のために。いつか東北を旅するときに知りあつた人の語りにじつと耳を傾けられるように。

(鷺田清一^{わしたきよかず}『おとなの背中』角川学芸出版より)

※1 慟哭：悲しみのあまり声をあげて泣くこと。

※2 都市プランナー：都市づくりのための知識を有する専門家。

※3 永田町内の泥仕合：永田町にある国会議事堂や首相官邸など

では、政治家同士が互いに相手の弱点・秘密などをあばきた
てて醜く争っている。このような状況を被災地に対して薄情
と考え、次段落では「酷薄な国会の混乱」と表現している。

※4 「憂国の情」：今後の国の将来が心配でつらいという気持ち。

※5 R・D・レイン：イギリスの医学者、精神科医、精神分析家。

※6 反芻：繰り返し考え、よく味わうこと。

※7 訥々と：口ごもりつつ、言葉をときれときれに言うさま。

問一 線⑥のひらがなを漢字に直しなさい。

問二 線1「外からの声は、ときに暴言になる」とありますが、

それはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを
次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 被災者への言葉は必ずしもその人たちの気持ちに寄りそう
ことができず、逆に傷つけてしまう場合もある、ということ。

イ 被災地と無関係な人々の発言は、失ったものに裏付けされ
ないため、気配りを欠くものばかりになる、ということ。

ウ 救出現場における報道は被災地の有様を伝えてはいるもの
の、救助活動には役立たないものである、ということ。

エ 被災地以外に暮らす人々の言葉には、被災者にとって不快
であるばかりか絶望させるものもある、ということ。

問三 線2「この対比は逆転してゆく」とありますが、それは

どのようなことですか。その説明として最も適当なものを次の中
から選び、記号で答えなさい。

ア ひどい被害を受けた被災地には、がれきと化した建造物や
今後の生活について途方に暮れる被害者があふれていたが、
被災地の外部には今までと変わらぬ普段どおりの生活があつ
た、ということ。

イ 被災直後、外部の人たちは被災地への配慮から口数が少な
く、被災者同士は積極的に声を掛け合っていたが、しだいに
被災者は閉鎖的になって口数が減り、部外者たちは被災地を
置き去りにした主張をしていった、ということ。

ウ 被災する前は都市部が活気に満ちあふれ、郊外である被災
地は静かな環境を保っていた一方、被災後は都市部が被害の
大きさに静まり返り、被災地は逆に互いを気づかう声を掛け
るようになっていった、ということ。

エ 当初、築き上げたものを失った人たちは皆同じような境遇
になった身近な人をだれかれなく気づかっていたが、住環境
が変化し互いの復興の格差を意識するようになると攻撃的な
言葉を使うようになってしまった、ということ。

問四 —— 線3 「被災した人たち」 『空語』とありますが、それはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

問六 —— 線5 「聴くというのは、思うほどたやすいことではない」とありますが、このように筆者が考えるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 被災地や被害を受けた人々に寄りそうように見せながら、実際は被災者のおかれた状況への想像を欠いた無意味で心に響かない発言。

ア 語り手のつらい体験をひたすら受け容れて聞き役に徹しようとしても、その理不尽さを前にすると、聞き手には心の余裕がなくなりどのように対応したらよいか分からなくなってしまうという問題点があるから。

イ 形式を重視するあまり、被災者を気づかうという本来あるべき意味が薄れ、ついには被災者に配慮したものとはいえないようになってしまふ発言。

イ 人は本当につらい時には本心を語ろうとしないため、聞き手には相手の言葉をひたすら待つ姿勢が求められる上に、語り手がつらい人生体験を打ち明ける言葉はその人固有のものなので共感することが難しいから。

ウ 被災地から遠く離れた場所で生活し、震災の被害を自らの商業的な好機として考える人々が掛けるいたわりに見せかけた中身のない発言。

エ 震災直後は大量に被災者へ届けられていた励ましや身を案じる言葉が時間の経過につれて減少し、結果的にはほとんどなくなってしまう発言。

ウ 語り手は語りなおしに生活環境が整うことと過去を振り返るための長い時間を必要とする一方、聞き手は被災者の途切れがちで不鮮明な言葉を確実にくみ取れているかに常に注意を払わなければいけないから。

問五 —— 線4 「語りなおしのプロセス」とありますが、それはどのようなことですか。それを説明した次の文を1・2を補って完成させなさい。ただし、文中から1は七字、2は十九字でそれぞれさがし、抜き出しなさい。

エ 語り手がつらい経験を語れるようになるには、長い時間が必要であり困難を伴うこともあるため、聞き手には傍らでただ待つ姿勢が求められるにもかかわらず、言葉を与えてしまうなどつい先を促してしまうから。

震災により被災した人々が1(七字)に立ち返らざるを得なくなる中で、理不尽な経験を受け容れ、これからも生きていくために自分を語りなおし、2(十九字)を成し遂げようとする。

問七 筆者は「被災した人たち」に対して、どのようにすることが望ましく、また、それができない場合はどうするべきだと考えていますか。七十文字以内でいいいに説明しなさい。

問七 筆者は「被災した人たち」に対して、どのようにすることが望ましく、また、それができない場合はどうするべきだと考えていますか。七十文字以内でいいいに説明しなさい。

問七 筆者は「被災した人たち」に対して、どのようにすることが望ましく、また、それができない場合はどうするべきだと考えていますか。七十文字以内でいいいに説明しなさい。

【国語】

解答用紙
(中学第二回)

受験番号

氏名

得点

一

問一
a

b

問二

問二

問三

[Blank area for question 3]

問四

問五

問五

問六

問六

問七

問七

[Blank area for question 7]

問八

[Blank area for question 8]

問九

[Blank area for question 9]

[Blank box]

[Blank box]

[Blank box]

[Blank area for score]

二

問一

あ

ぶ
っ
し

い

き
ぎ
まれた

う

に
ち
よ
う

え

ろ
ん
び
よ
う

お

あ
ず
け
な
い

問二

問三

問四

問五

1

2

問六

問七